

HIV 問題に関する学生の意識調査から見えてくる課題

近畿大学人権問題研究所准教授 熊本理抄

本稿では、HIV 問題に関する近畿大学学生の意識調査から見えてくる今後の教育・啓発活動の課題を提起する。本稿執筆にあたっては、「特定非営利活動法人 HIV と人権・情報センター」の尾澤るみ子さんと大釜正希さんに助言をいただいた。また、本稿で紹介している HIV に関する情報も同センターからの提供に依る。ここに記して感謝するとともに、本調査をきっかけに新たな関係性が生まれたことを学生への今後の教育・啓発活動に活かしていきたいと考えている。

1. HIV に関する知識について

① HIV に関する知識の有無と認知経路

問 13 および問 13・付問 1 では、HIV・エイズに関する学生の認知について尋ねている（18～19 頁参照）。

「HIV・エイズがどのような病気であるのか」を「知っている」学生は 47.1%、「少し知っている」学生が 48.7%、「全く知らない」学生が 3.3%となっている。「知っている」「少し知っている」学生が HIV・エイズについて「はじめて」知ったきっかけは、「学校の授業で教わった」が最も多く 75.5%、次に「テレビや映画、新聞などマスコミ報道で知った」のが 10.2%と続くが、残りの項目は、0.3%～2.1%となっている。大学生が知ったという「マスコミ報道」の詳しい内容が気になる場所である。

② HIV に関する知識内容

問 14「HIV・エイズという病気についてどのように理解していますか」と尋ねた問いの回答結果を示したものが図 1 である。

「(4)HIV は感染症であるが、性行為を除けば、日常生活では感染しない病気である」と思わない、つまり、「日常生活で感染する病気である」と思っている学生が 50.2%と半数いることは注目すべき点である。HIV と人権・情報センターによると、これは中学生と同程度の数字であるという。いかに教育が行き届いていないかを明示している。

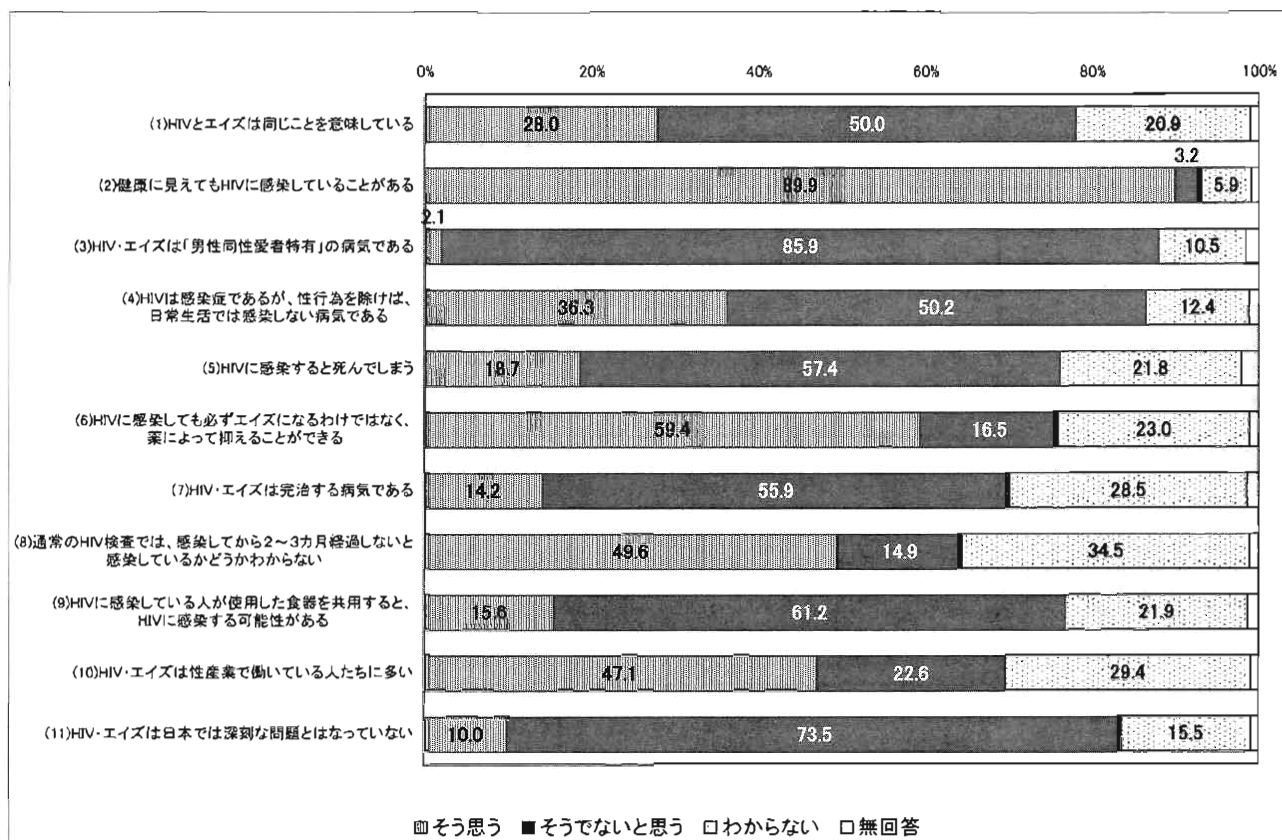
性教育がバッシングを受けて、一斉に教育現場で実施されなくなったことが影響しているのではないかと、この点については、情報を持たない学生が今後さらに増えてくるのではないかと、との指摘を尾澤さんから受けた。また、「性行為」が何を意味するのかは人によって異なること、挿入することなのか、キスすることなのか、ハグをすることなのか、性器をなめることなのか、大人たちが伝えたいことを具体的かつ明確に伝えないと、子どもや若者には正確な情報や知識が伝わらない、と尾澤さんは指摘する。人間関係が希薄になっているなかで、キスをすることや唾液を共有することが親密な関係だと学生たちは思っているのではないかと、とのことだった。一方で、フェラチオでは性感染症には感染しないという思い込みを持っている（いた）学生に出会うことがわたし自身もある。HIV と人権・情報センターでは、Young for Young Sharing Program (YYSP) のなかで、人形を使って、どのような性行為で感染するのかしないのか、を具体的に子どもたちに説明している。

その他の項目を見てみると、上述したように、日常生活で感染する病気であると思っている学生が 50.2%と半数いる一方、「(9)HIV に感染している人が使用した食器を共用すると、HIV に感染する可能

性がある」と思う学生は15.6%である。学生にとっての日常生活の行為に食器の共用は入っていないのだろうか。

「(11)HIV・エイズは日本では深刻な問題とはなっていない」の項目では、「そうでないと思う」と回答した学生、つまり、HIV・エイズは日本では深刻な問題となっていると思う学生が、73.5%いることも意外であった。しかし、どのような情報をどのような経路で得ながら、「深刻な問題」と思っているのかが知りたいところである。

図1 HIV・エイズに関する知識（問14）



③ 「わからない」という回答の多さ

図1の回答結果では、「わからない」という回答が2割や3割を超える項目が多いことが気になる。「わからない」という状況や正確な情報を持ちえていない状況がさまざまな憶測を学生に抱かせているのではないかと考えれば、性教育やエイズ教育の重要性を改めて感じる結果となった。

たとえば、「(5)HIVに感染すると死んでしまう」や「(6)HIVに感染しても必ずエイズになるわけではなく、薬によって抑えることができる」という項目について「わからない」学生が5人に1人いるが、正確な情報や知識を得ていれば、もう少し少ない割合になったであろうと大釜さんは指摘する。

また、尾澤さんからは、「わからない」ことは差別する側に回ってしまうのではないかと、との疑問が出された。そこで、問14のうち「(5)HIVに感染すると死んでしまう」の項目を取り上げ、問21で尋ねているHIV陽性者に対する抵抗感との関連をみた。その結果が表1である。

「HIVに感染すると死んでしまう」の問いに対し、「わからない」と答えている学生は、HIV陽性者

との各状況において抵抗を感じるかどうかの問いに対しても「わからない」と答えている割合が高くなっている（表1 網かけ部分）。「一緒に入浴すること」「結婚すること」については、「抵抗を感じない」「わからない」の回答よりも、「抵抗を感じる」と答えた学生の方が多くなっている。

情報・知識・理解を問う問いでは「わからない」と答え、行動・態度を問う問いでも「わからない」と答える学生は忌避意識をもつ側に回るのか、今後さらに調べていく必要性を感じる。

表1 HIVに関する知識とHIV陽性者に対する抵抗（問14と問21のクロス表）

		先生や同級生がいること			同じ職場で働くこと			近所に住むこと					
		N	抵抗を感じる	抵抗を感じない	わからない	N	抵抗を感じる	抵抗を感じない	わからない	N	抵抗を感じる	抵抗を感じない	わからない
HIVに感染すると死んでしまう	そう思う	207	29.5%	59.9%	10.6%	207	22.2%	69.6%	8.2%	207	15.0%	76.8%	8.2%
	そうでないと思う	637	14.9%	74.9%	10.2%	637	10.8%	80.2%	8.9%	635	6.1%	85.7%	8.2%
	わからない	240	14.2%	61.3%	24.6%	241	9.1%	67.2%	23.7%	241	5.0%	71.8%	23.2%
		一緒に食事をする			手をつないだり身体にふれること								
		N	抵抗を感じる	抵抗を感じない	わからない	N	抵抗を感じる	抵抗を感じない	わからない				
HIVに感染すると死んでしまう	そう思う	207	27.5%	62.8%	9.7%	207	44.0%	45.4%	10.6%				
	そうでないと思う	635	16.5%	73.2%	10.2%	634	28.9%	60.4%	10.7%				
	わからない	241	12.9%	60.6%	26.6%	241	24.9%	46.9%	28.2%				
		一緒に入浴すること			結婚すること								
		N	抵抗を感じる	抵抗を感じない	わからない	N	抵抗を感じる	抵抗を感じない	わからない				
HIVに感染すると死んでしまう	そう思う	207	58.0%	29.0%	13.0%	207	66.7%	16.4%	16.9%				
	そうでないと思う	637	47.7%	39.4%	12.9%	637	54.9%	26.1%	19.0%				
	わからない	241	43.2%	26.6%	30.3%	241	43.2%	21.2%	35.7%				

④HIV・エイズとは？

HIV感染＝エイズではない。HIVとは、「ヒト免疫不全ウイルス」(Human Immune-deficiency Virus)の英語名の頭文字をとって命名されたいわゆるエイズウイルスで、エイズは正式には「後天性免疫不全症候群」(Acquired Immune Deficiency Syndrome)といい、HIVによって引き起こされる病気である。HIVが体中に入り、そのまま体の中にありつづけることをHIV感染という。HIVに感染し治療をしなければ、HIVは体内で増殖を続け、体の免疫力が次第に低下し、健康な状態なら防げるような特定の病気にかかりやすくなる。このような症状が出てきた段階をエイズ発症という。

HIV感染者・エイズ患者数は19,886人で（『平成22（2010）年エイズ発生動向年報』）、ここ数年、年間約1,500人ずつ増加している。にもかかわらず、検査数は減少している。エイズを発症して、はじめて感染を知る例も増加している。セックスの相手が誰であろうと感染する可能性があり、誰にでも身近にありうることである。

HIVはヒトの体の体液の中におり、血液、精液、膣分泌液、母乳の4つの体液に感染力がある。唾液、涙、鼻水、汗、尿には感染力はない。HIVが体内に入る入り口となる粘膜は、口、肛門、ペニスの先、膣、目、鼻の穴である。

感染経路には、①血液感染、②母子感染、③性感染の3つがある。①血液感染の場合には、麻薬の回し打ちによる注射器具の共用によって、直接血液が体内に入ることになり、感染の可能性はある。②母

子感染では、母親が感染者であれば、胎盤を通じた子宮内感染の可能性や、出産時に胎児が産道を通る際、母親の血液を胎児が体全体で浴びたり、胎児が母親の母乳を直接口から飲むことで、胎児に感染する可能性がある。③性感染は、コンドーム等で予防をしないセックス（自分が相手の性器を直接なめる行為や挿入行為）があれば、HIVの感染力のある体液を、直接、口や性器、肛門から直接体内に取り込むことで、感染の可能性はある。握手をしたり体に触れること、文房具や吹奏楽器などの共用、鍋など同じ料理をつつくこと、蚊やノミ、空気、水、せきやくしゃみ、食事、缶などの回し飲み、つり革や手すり、公衆浴場やトイレ、プールやシャワー、理美容などでは感染しない。性行為以外の日常生活で感染することはない。

近年では、約30種類の抗HIV薬が開発されており、感染してもウイルスを抑えてエイズ発症を予防したり遅らせることができる。治療が進んでおり、エイズを発症しても必ずしも死に至る病気ではなくなってきた。ウイルスの増殖を抑えるために薬を飲み続けるなどの治療を続ければ、仕事や学業も続けられるし、結婚して子どもを産むこともできる。HIV感染症を完全に治す治療法はまだないが、HIV感染症は、治療可能な慢性疾患の1つである。

HIVに感染した場合、多くは6～8週間程度で、血液検査で判定できるようになる。この時期には個人差があり、感染していても血液検査で判定できない場合があるため、最後に感染の可能性のあった日から12週間以上経過してから再度検査を受ければ、血液検査で正確に判断できる。

2. 日常生活での経験と情報について

問15では、「HIV陽性者の人から話を聞いたり、出会ったりしたこと」があるかどうかを尋ねている（25頁参照）。「自分の家族・親族にHIV陽性者がいる（いた）」と回答した学生が0.2%（2名）、「自分の友人・知人にHIV陽性者がいる（いた）」学生が1.6%（18名）いる。

1,117名の回答者のうち20名に、家族・親族、友人・知人といった身近な存在にHIV陽性者がいる。「友人・知人」の年代や関係性は不明だが、日本の感染率や若年層の感染者増加を思えば、頷ける数字でもある。噂といったレベルでのものなのか、HIV感染をカミングアウトされるような存在や関係性としてその回答者がいたのか、そのあたりはわからないが、この20名の学生に対する周囲のサポートがどのようなものであったのかが気にかかる、とHIVと人権・情報センターの二人は指摘する。

3. 学習の経験について

①学校や地域での学習経験

問16では、これまでの学習経験を尋ねている（25頁参照）。

「小学校や中学校で受けた」学生が64.4%、「高校で受けた」学生が68.8%いる一方、「大学で受けた」学生は18.9%と低い。ただ、伝える側の差別意識や偏見が伝わることもあるため、数字のみを見るのではなく、学習経験の中身が大切だと尾澤さんは力説する。

大釜さんは、大学での学習経験の低さと、小中学校、高校と同程度の大学における学習の重要性を指摘する。入学式や入学後のオリエンテーション、健康診断の際に学生に啓発を行ったり、啓発イベントに支援団体を招くなどの取り組みが大学でも必要になる。学生たちが不正確な認識を持っているとすれば、その認識を是正していくためには、HIVに関する教育や性的自己決定権に関する教育が大学でも不可欠である。来年度以降、わたしが担当している「人権と社会」の授業や、年に3回行われる人権講演会でぜひ実践していきたい。HIVと人権・情報センターは、大学における啓発活動も行っているが、大

学では、保健センターからの依頼のみならず、大学教員とのつながりのなかで授業に行くことがあるという。大学教員の意識向上が重要である。同時に、教職員を守っていくためにも、教職員に対する啓発活動も実施すべきである。

②啓発の取り組みにおける学習経験

問 17 では、HIV・エイズに関する啓発の取り組みで、「実際に見たもの、行ったことがあるもの」を尋ねている（26 頁参照）。最も多い回答は、「テレビ番組」で 51.1%、次に「パンフレット・冊子」が 26.2%、「ビデオ・DVD・映画」が 25.6%と続く。「いずれもない」と回答した学生が 14.3%いた。

大釜さんは、「行政の広報誌・広報紙」という回答が 3.0%だったのを受け、社会問題としての関心が学生の中で低いと指摘する。

4. 状況・認識について

①HIV・陽性者やその家族に対する偏見・差別

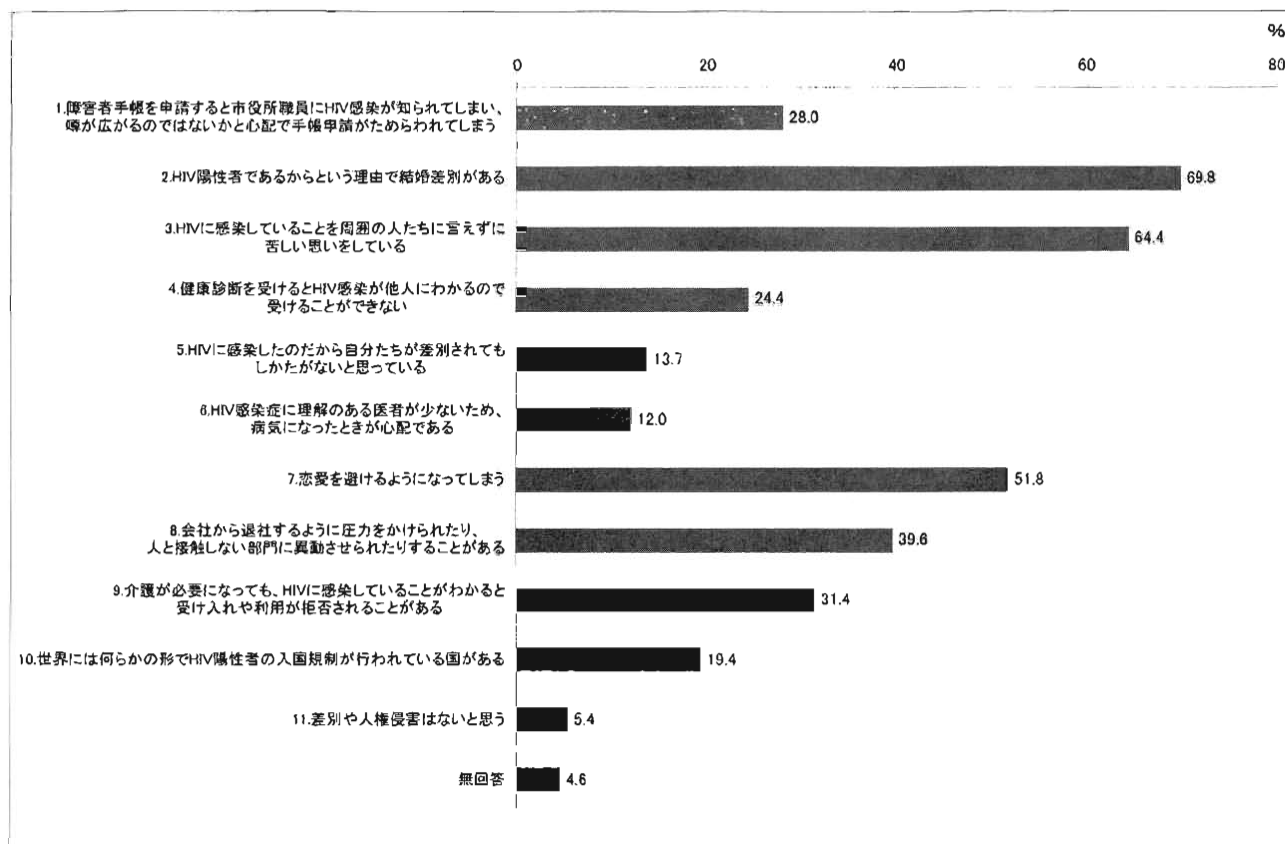
問 18 では、HIV 陽性者やその家族に対する偏見・差別に関する認識を尋ねている（26 頁参照）。「今でも、HIV 陽性者やその家族に対する偏見や差別があると思いますか」との問いに対し、回答結果は「かなりあると思う」21.6%、「少しはあると思う」52.2%、「ないと思う」10.6%、「わからない」14.1%となっている。

続いて、問 18 で HIV 陽性者やその家族に対する偏見・差別が「かなりあると思う」「少しはあると思う」と回答した学生に、「こうした差別は近い将来、なくすことができますか」と尋ねたところ、「完全になくすことができる」5.7%、「かなりなくすことができる」39.7%、「なくすことは難しい」53.8%との回答結果となった（27 頁参照）。

②差別・人権侵害の内容

HIV 陽性者に対する差別・人権侵害にどのようなものがあると思うかを尋ねた問 19 の回答結果を示したものが図 2 である。一番回答が多かったのは、「2.HIV 陽性者であるからという理由で結婚差別がある」69.8%で、「3.HIV に感染していることを周囲の人たちに言えずに苦しい思いをしている」が 64.4%、「7.恋愛を避けるようになってしまう」51.8%と続く。

図2 HIV陽性者に対する差別・人権侵害の内容（問19）



③結婚への忌避

HIV陽性者に対する差別・人権侵害のうち、図2のとおり、結婚や恋愛における差別や忌避があると多くの学生が回答していることがわかる。「2.HIV陽性者であるからという理由で結婚差別がある」ことがHIV陽性者に対する差別・人権侵害だととらえている学生は、自身がHIV陽性者と結婚することをどのように考えているのだろうか。

表2は、問19「2.HIV陽性者であるからという理由で結婚差別がある」と答えている人が、問21「(7)HIV陽性者と結婚すること」について抵抗を感じるかどうかを見たものである。結婚差別があると思っている人の6割が、HIV陽性者との結婚に抵抗を感じている。結婚差別はないと答えている人も、4割が自身の結婚については抵抗を感じており、結婚差別はないと答えている人の3割が「わからない」と答えている。

表2 HIV陽性者に対する結婚差別の認識と結婚することへの抵抗（問19と問21のクロス表）

HIV陽性者に対する結婚差別		HIV陽性者と結婚すること			合計
		抵抗を感じない	抵抗を感じる	わからない	
ない		79	120	84	283
		27.9%	42.4%	29.7%	100.0%
ある		169	472	138	779
		21.7%	60.6%	17.7%	100.0%
合計		248	592	222	1062
		23.4%	55.7%	20.9%	100.0%

HIV と人権・情報センターの尾澤さんは、「あなたが大切だと思っている人が HIV に感染している(いた)としても、その大切さは変わらないのではないかと子どもや若者たちに問いかけるという。本調査結果において、恋愛や結婚に対する忌避や差別が強いという結果が出たことに鑑みれば、恋愛とは何か、結婚とは何か、という問いが浮上するのではないかと指摘する。HIV 検査に来たカップルにも、「あなた/パートナーが感染していたらどうするか」との問いかけをしながら、パートナーとは何か、パートナーとの関係性はいかなるものか、セックスをするというのはどういうことなのかを考えてもらい、エイズはそれを教えてくれるのだと伝えるという。パートナーが感染していたら、と他者や大切な人に思いをはせる意識が弱いと、差別が温存される、と指摘する。

5. 学部による比較

薬学部ならびに医学部の学生の方が、HIV・エイズ問題に関する知識を問う問 14 では正確な理解をしていることがわかる(19~24 頁参照)。

そこで、薬学部・医学部を「医療系学部」とし、「それ以外の学部」との比較を行った。

問 15 で「5.HIV 陽性者の人のことを取り上げた本を読んだり、テレビの番組を見たことがある」と回答した学生は医療系学部の学生の方がそれ以外の学部の学生よりも約 17%高い(表 3)。

表 3 HIV 陽性者の人のことを取り上げた本やテレビ番組との接触(問 15 の 5)

	本を読んだりテレビ番組を見たことがある		合 計
	ない	ある	
医療系学部	131 54.6%	109 45.4%	240 100.0%
それ以外の学部	591 71.5%	236 28.5%	827 100.0%
合 計	722 67.7%	345 32.3%	1067 100.0%

また、学習経験を尋ねる問 16 では、「3.大学で受けた」との回答は、医療系学部がそれ以外の学部より約 23%高くなっている(表 4)。

表 4 大学における学習経験(問 16 の 3)

	大学における学習経験		合 計
	ない	ある	
医療系学部	153 63.5%	88 36.5%	241 100.0%
それ以外の学部	718 86.3%	114 13.7%	832 100.0%
合 計	871 81.2%	202 18.8%	1073 100.0%

表 5 は、問 17 にあげた啓発の取り組みのうち「実際に見たもの、行ったことがあるもの」として、「ある」と回答した割合を医療系学部とそれ以外の学部とで比較したものである。医療系学部の学生の方が割合が高い。

表5 啓発の取り組みにおける学習経験（問17）

	テレビ番組	ビデオ・DVD・映画	パンフレット・冊子	本	パネル展	講演会	行政広報誌(紙)	インターネット	新聞や雑誌	いずれもない
医療系学部	137 56.8%	65 27.0%	77 32.0%	52 21.6%	15 6.2%	33 13.7%	10 4.1%	45 18.7%	62 25.7%	24 10.0%
それ以外の学部	419 50.4%	217 26.1%	210 25.3%	114 13.7%	5 0.6%	94 11.3%	24 2.9%	92 11.1%	112 13.5%	132 15.9%

表6は、「HIV陽性者に対する差別・人権侵害にはどのようなものがあると思いますか」と複数回答方式で尋ねている問19において、HIV陽性者に対する差別や人権侵害があると回答した者の割合を、項目ごとに医療系学部とそれ以外の学部で比較したものである。医療系学部の学生の方が、HIV陽性者に対する差別や人権侵害があると認知している回答が高い傾向にある。注目したいのは、「手帳申請」「健康診断」「病気になったとき」「介護」など、医療や福祉サービスの分野において差別・人権侵害があると回答している割合が医療系学部の学生の方が高い傾向にある点である。

表6 差別・人権侵害の内容（問19）

	手帳申請がためらわれてしまう	HIV陽性者であるからという理由で結婚差別がある	HIVに感染していることを周囲の人たちに言えずに苦しい思いをしている	健康診断を受けるとHIV感染が他人にわかるので受けることができない	HIVに感染したのだから自分たちが差別されてもしかたがないと思っている	HIV感染症に理解のある医者が少ないため、病気になったときが心配である	恋愛を避けるようになってしまった	会社から退社するように圧力をかけられたり、人と接触しない部門に異動させられたりすることがある	介護が必要になっても、HIVに感染していることがわかると受け入れや利用が拒否されることがある	世界には何らかの形でHIV陽性者の入国規制が行われている国がある	差別や人権侵害はないと思う
医療系学部	96 40.7%	181 76.7%	159 67.4%	85 36.0%	39 16.5%	40 16.9%	140 59.3%	124 52.5%	105 44.5%	53 22.5%	11 4.7%
それ以外の学部	209 26.1%	577 72.0%	541 67.5%	177 22.1%	110 13.7%	91 11.4%	419 52.3%	308 38.5%	235 29.3%	158 19.7%	49 6.1%

HIV陽性者との結婚については、医療系学部の学生の63.5%が抵抗を感じると回答しており、それ以外の学部の学生の51.6%という回答より高くなっている（表7）。

表7 HIV陽性者と結婚することへの抵抗感（問21）

	HIV陽性者と結婚すること			合計
	抵抗を感じる	抵抗を感じない	わからない	
医療系学部	153 63.5%	40 16.6%	48 19.9%	241 100.0%
それ以外の学部	428 51.6%	210 25.3%	191 23.0%	829 100.0%
合計	581 54.3%	250 23.4%	239 22.3%	1070 100.0%

さらに、「HIVに感染したかもしれないと不安になる出来事が生じた」ときに、「検査をためらったり、検査を受けに行かないと思う」理由として、問23・付問1で、「1.HIVに感染しているとわかるのがこわいから」と回答している医療系学部の学生は77.3%、それ以外の学部の学生では61.7%となっている（表8）。

表8 検査をためらったり受けに行かない理由（問23・付問1）

	感染していることがわかるとこわい		合 計
	ない	ある	
医療系学部	22 22.7%	75 77.3%	97 100.0%
それ以外の学部	114 38.3%	184 61.7%	298 100.0%
合 計	136 34.4%	259 65.6%	395 100.0%

一方、検査をためらったり受けに行かない理由として、「5.HIV感染がわかっても、どう対応してよいかわからないから」は、医療系学部で29.9%、それ以外の学部で46.0%となっている（表9）。

表8と表9の医療系学部の学生の回答からは、それ以外の学部の学生と比して、「対応についてはわかっているが感染していることがわかるとこわい」から検査を受けないという意識を持っていることがわかる。検査に関して、今後の対応や対処方法を検討する必要があるのではないだろうか。

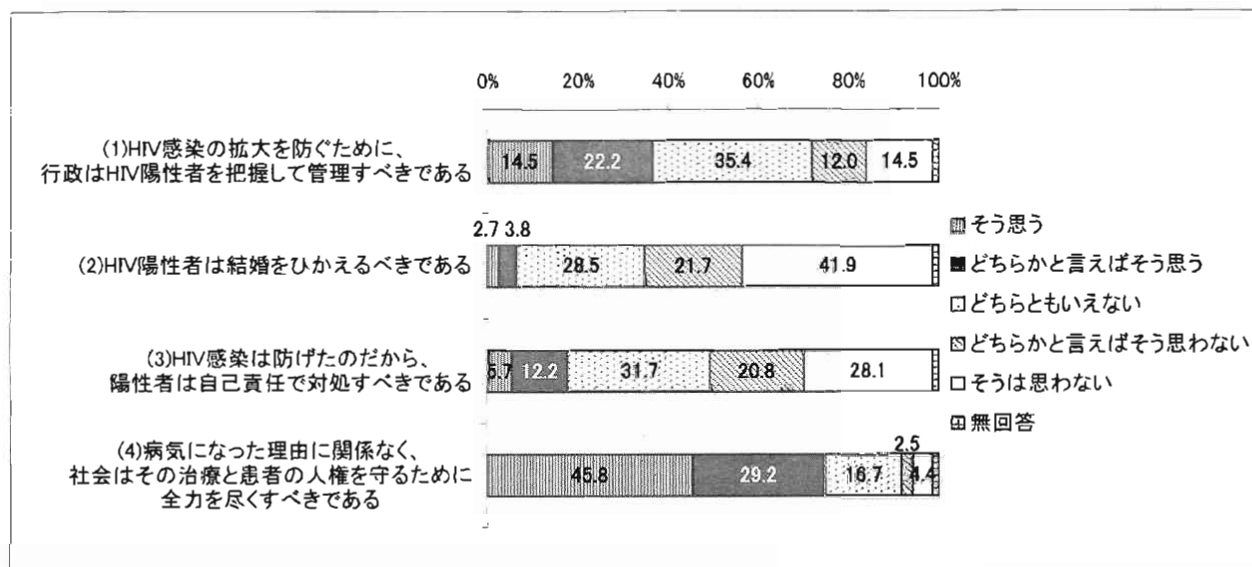
表9 検査をためらったり受けに行かない理由（問23・付問1）

	感染がわかってもどう対応してよいかわからない		合 計
	ない	ある	
医療系学部	68 70.1%	29 29.9%	97 100.0%
それ以外の学部	161 54.0%	137 46.0%	298 100.0%
合 計	229 58.0%	166 42.0%	395 100.0%

6. 差別のとらえ方について

問20では、差別のとらえ方について4つの項目に関する考えを尋ねている。項目ならびに回答結果は図3のとおりである。「どちらともいえない」の回答の高さが気になる。

図3 差別に対する考え方（問20）



尾澤さんと大釜さんによると、実際に社会の声を聞いてみれば、HIV感染は自業自得であり、「良いエイズ」と「悪いエイズ」とに分けて、前者には「かわいそう」だと同情する風潮があるという。しかし、学生の回答を見てみると、「(3) HIV感染は防げたのだから、陽性者は自己責任で対処すべきである」と「思わない」学生が、「そうは思わない」「どちらかと言えばそうは思わない」回答者を合わせて、48.9%いる。

また、「(4) 病気になった理由に関係なく、社会はその治療と患者の人権を守るために全力を尽くすべきである」と「思う」学生が、「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」を合わせると、75.0%になる。

「人としてはこう答えるべき」「他者の立場であればそう答えるべき」だが、それはあくまでも他者のことや遠く離れた人のことであって、自分のこととなったらどうなのだろうか、数字としては、自己責任と思わない学生や、社会による治療と人権保障が必要だと思っている学生の割合が高いが、自分だったらどうなのだろうか、との提起を受け、問21とのクロス集計を行った。その結果が表10のとおりである。

問20「(4) 病気になった理由に関係なく、社会はその治療と患者の人権を守るために全力を尽くすべきである」という考え方に対して、「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」を「そう思う」、「そうは思わない」「どちらかと言えばそうは思わない」を「そうは思わない」とした。また、問21のHIV陽性者との7つの状況についてどれくらいの抵抗を感じるか、という問いに対し、「とても抵抗を感じる」「やや抵抗を感じる」を「抵抗を感じる」、「まったく抵抗を感じない」「あまり抵抗を感じない」を「抵抗を感じない」とした。

驚いたことに、「病気になった理由に関係なく、社会はその治療と患者の人権を守るために全力を尽くすべきである」の項目において、「そう思う」と答えた学生の方が、「そうは思わない」と答えた学生よりも、問21にあげるHIV陽性者との各状況において「抵抗を感じる」と答えた割合が、5ポイントから21ポイント高い（表10網かけ部分）。

尾澤さんと大釜さんが指摘するように、一般的な人権意識としては、「病気になった理由に関係なく、社会はその治療と患者の人権を守るために全力を尽くすべきである」と回答しているが、身近な問題や身近な関係としてとらえたときには、忌避や排除をするということである。HIV問題を身近な問題や身

近な関係、自分の問題として学生たちがとらえ考える教育が必要である。

表 10 差別のとらえ方と HIV 陽性者に対する抵抗感（問 20(4)と問 21 のクロス表）

		先生や同級生がいること			同じ職場で働くこと				近所に住むこと				
		N	抵抗を感じる	抵抗を感じない	わからない	N	抵抗を感じる	抵抗を感じない	わからない	N	抵抗を感じる	抵抗を感じない	わからない
病気がなった理由に関係なく、社会はその治療と患者の人権を守るために全力を尽くすべきである	そう思う	834	17.5%	73.4%	9.1%	835	13.2%	79.3%	7.5%	834	7.1%	86.2%	6.7%
	そうは思わない	75	12.0%	56.0%	32.0%	75	6.7%	61.3%	32.0%	74	9.5%	59.5%	31.1%
	どちらともいえない	186	20.4%	53.8%	25.8%	186	14.0%	61.3%	24.7%	186	10.2%	64.0%	25.8%
		一緒に食事をする			手をつないだり身体にふれること								
		N	抵抗を感じる	抵抗を感じない	わからない	N	抵抗を感じる	抵抗を感じない	わからない				
病気がなった理由に関係なく、社会はその治療と患者の人権を守るために全力を尽くすべきである	そう思う	834	18.2%	72.3%	9.5%	832	32.2%	57.3%	10.5%				
	そうは思わない	74	10.8%	59.5%	29.7%	75	17.3%	54.7%	28.0%				
	どちらともいえない	186	19.4%	53.2%	27.4%	186	30.1%	42.5%	27.4%				
		一緒に入浴すること			結婚すること								
		N	抵抗を感じる	抵抗を感じない	わからない	N	抵抗を感じる	抵抗を感じない	わからない				
病気がなった理由に関係なく、社会はその治療と患者の人権を守るために全力を尽くすべきである	そう思う	835	50.3%	36.6%	13.1%	835	57.4%	23.7%	18.9%				
	そうは思わない	75	32.0%	36.0%	32.0%	75	36.0%	25.3%	38.7%				
	どちらともいえない	186	47.8%	24.7%	27.4%	186	48.9%	21.0%	30.1%				

7. 態度や行動について

①HIV 陽性者に対する抵抗感

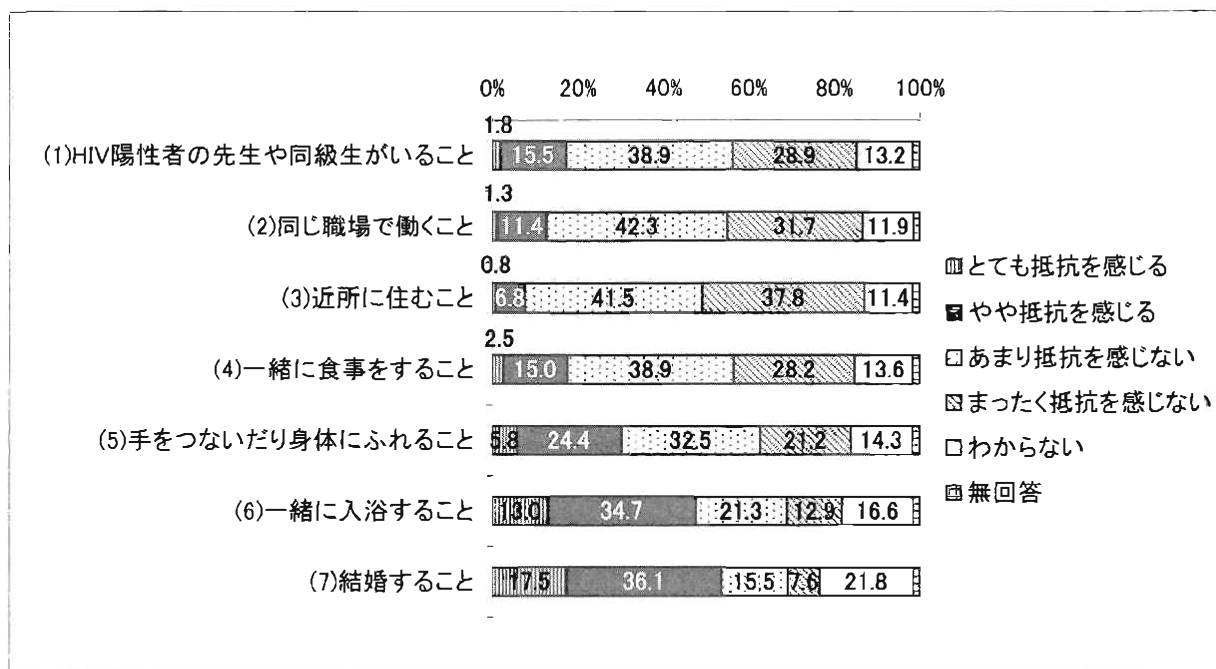
問 21 では、7 つの状況をあげ、それぞれの状況について抵抗を感じるかどうかを尋ねている。図 4 がその結果である。

「(4)一緒に食事をする」→「(5)手をつないだり身体にふれること」→「(6)一緒に入浴すること」→「(7)結婚すること」といったように、その距離間が近くなるほど、「抵抗を感じる」と回答した人や「わからない」と回答している人が増えているのがわかる。パブリックからプライベートへの移行や身体的距離間の変化が回答に表れている。しかし「わからない」という回答が親密度によって増えているのはなぜなのだろうか。

親密度によって抵抗の度合いや「わからない」という回答割合が変わっているのは、今の学生の他者との関係性の持ち方を表しているのではないかと尾澤さんは指摘する。「(4)一緒に食事をする」の回答結果を見ても、一緒に食事をするような親密な関係があまりないのかもしれない、と。

なお、HIV と人権・情報センターの調査によると、学習プログラムを実践した結果、同様の質問項目で、「抵抗を感じる」と回答していた生徒の割合が少なくなり、学習によって効果があることを示していたという（106 頁参照）。

図 4 HIV 陽性者との状況において抵抗を感じる状況（問 21）



② 偏見・差別の認知と HIV 陽性者に対する抵抗感

問 18 「あなたは、今でも、HIV 陽性者やその家族に対する偏見や差別があると思いますか」の問いに対し、「かなり偏見や差別があると思う」と回答している学生と、「偏見や差別はないと思う」と回答している学生とでは、HIV 陽性者との抵抗感に違いがあるのだろうか。比較してみたのが表 11 である。偏見や差別は「ないと思う」学生より、「かなりあると思う」学生の方が、「抵抗を感じる」との回答が、7 ポイントから 26 ポイント高くなっている（表 11 網かけ部分）。

HIV 陽性者やその家族に対する偏見や差別は「かなりある」と認識している学生の方が自らも HIV 陽性者に対して抵抗を感じる、と回答している割合が高いことがわかる。さらに表 11 からは、HIV 陽性者やその家族に対する偏見や差別は「ない」と思っている学生も、自らのことに関しては、HIV 陽性者に対する抵抗感を持っていることもわかる。学生のその意識や態度が HIV 陽性者やその家族に対する偏見や差別を生みだし維持している、逆にいえば、学生のこうした意識や態度が変われば差別をなくすことができるのだと学生たちに伝えていきたい。

表 11 差別の認知と HIV 陽性者に対する抵抗感（問 18 と問 21 のクロス表）

		先生や同級生がいること				同じ職場で働くこと				近所に住むこと			
		N	抵抗を感じる	抵抗を感じない	わからない	N	抵抗を感じる	抵抗を感じない	わからない	N	抵抗を感じる	抵抗を感じない	わからない
HIV 陽性者 やその家族 に対する差別 や偏見	かなりある と思う	241	28.2%	63.1%	8.7%	241	22.0%	72.2%	5.8%	240	13.3%	81.7%	5.0%
	少しはある と思う	581	17.6%	72.1%	10.3%	581	11.7%	79.2%	9.1%	580	6.4%	85.3%	8.3%
	ないと思う	116	8.6%	85.3%	6.0%	117	9.4%	83.8%	6.8%	117	6.0%	88.0%	6.0%
	わからない	153	8.5%	54.9%	36.6%	153	5.9%	58.8%	35.3%	153	5.9%	57.5%	36.6%
		一緒に食事をする				手をつないだり身体にふれること							
		N	抵抗を感じる	抵抗を感じない	わからない	N	抵抗を感じる	抵抗を感じない	わからない				
HIV 陽性者 やその家族 に対する差別 や偏見	かなりある と思う	241	28.6%	65.1%	6.2%	240	45.4%	48.3%	6.2%				
	少しはある と思う	581	17.7%	70.7%	11.5%	579	31.3%	57.0%	11.7%				
	ないと思う	115	7.0%	85.2%	7.8%	117	22.2%	70.1%	7.7%				
	わからない	153	10.5%	52.3%	37.3%	153	13.7%	45.1%	41.2%				
		一緒に入浴すること				結婚すること							
		N	抵抗を感じる	抵抗を感じない	わからない	N	抵抗を感じる	抵抗を感じない	わからない				
HIV 陽性者 やその家族 に対する差別 や偏見	かなりある と思う	241	64.3%	27.8%	7.9%	241	71.0%	14.1%	14.9%				
	少しはある と思う	581	50.8%	35.6%	13.6%	581	56.1%	25.5%	18.4%				
	ないと思う	117	37.6%	50.4%	12.0%	117	50.4%	31.6%	17.9%				
	わからない	153	25.5%	30.1%	44.4%	153	27.5%	23.5%	49.0%				

③差別解消の展望と HIV 陽性者に対する抵抗感

問 18 で「かなり」もしくは「少しは」偏見や差別があると思うと答えた学生に、問 18・付問 1 で「こうした差別は近い将来、なくすことができると思いますか」との問いに対して、「完全になくすことができる」、「かなりなくすことができる」、「なくすことは難しい」と回答した学生が抱く HIV 陽性者に対する抵抗感をみたものが表 12 である。

度数が少ないため留意が必要であるが、全体的な傾向をみたいと思う。HIV 陽性者やその家族に対する偏見や差別は近い将来、「なくすことは難しい」と回答している学生の方が、「完全になくすことができる」と思っている学生より、HIV 陽性者に対して「抵抗を感じる」との回答は、5 ポイントから 35 ポイント高くなっている（表 12 網かけ部分）。

学生一人ひとりがその意識や態度を変えるだけでなく、HIV 陽性者やその家族に対する偏見や差別のない社会をつくっていくという強い意志と行動を身につけることによって、差別を解決していくことができるのだと伝えていきたい。

表 12 差別解消の将来展望と HIV 陽性者に対する抵抗感（問 18・付問 1 と問 21 のクロス表）

		先生や同級生がいること				同じ職場で働くこと				近所に住むこと			
		N	抵抗を感じる	抵抗を感じない	わからない	N	抵抗を感じる	抵抗を感じない	わからない	N	抵抗を感じる	抵抗を感じない	わからない
差別や偏見は近い将来、なくすことができるか	完全になくすことができる	47	10.6%	78.7%	10.6%	47	4.3%	85.1%	10.6%	47	6.4%	83.0%	10.6%
	かなりなくすことができる	327	14.4%	76.1%	9.5%	327	9.2%	82.9%	8.0%	326	4.6%	87.7%	7.7%
	なくすことは難しい	442	26.5%	63.3%	10.2%	442	19.9%	71.9%	8.1%	441	11.3%	81.9%	6.8%
		一緒に食事をする				手をつないだり身体にふれる							
		N	抵抗を感じる	抵抗を感じない	わからない	N	抵抗を感じる	抵抗を感じない	わからない				
差別や偏見は近い将来、なくすことができるか	完全になくすことができる	47	14.9%	74.5%	10.6%	47	19.1%	70.2%	10.6%				
	かなりなくすことができる	327	13.8%	75.2%	11.0%	324	28.4%	59.9%	11.7%				
	なくすことは難しい	442	26.7%	64.0%	9.3%	442	42.3%	48.6%	9.0%				
		一緒に入浴すること				結婚すること							
		N	抵抗を感じる	抵抗を感じない	わからない	N	抵抗を感じる	抵抗を感じない	わからない				
差別や偏見は近い将来、なくすことができるか	完全になくすことができる	47	27.7%	61.7%	10.6%	47	55.3%	25.5%	19.1%				
	かなりなくすことができる	327	47.7%	38.2%	14.1%	327	53.2%	26.3%	20.5%				
	なくすことは難しい	442	62.7%	26.7%	10.6%	442	66.5%	18.3%	15.2%				

④差別のとらえ方と HIV 陽性者に対する抵抗感

問 20 では、差別のとらえ方についての考えを尋ねている。それぞれの考え方に対して、「そう思う」と「どちらかと言えばそう思う」の回答を「そう思う」とし、「そうは思わない」と「どちらかと言えばそうは思わない」を「そう思わない」とし、HIV 陽性者に対する抵抗感とのクロス集計を行った。結果が表 13～表 15 のとおりである。結論から言えば、「HIV 感染の拡大を防ぐために、行政は HIV 陽性者を把握して管理すべきである」、「HIV 陽性者は結婚をひかえるべきである」、「HIV 感染は防げたのだから、陽性者は自己責任で対処すべきである」との考え方について「そう思う」と回答した学生の方が、「そうは思わない」と回答した学生よりも、HIV 陽性者に対する抵抗感が強いという回答をしている（表 13～表 15 網かけ部分）。

「HIV 感染の拡大を防ぐために、行政は HIV 陽性者を把握して管理すべきである」との項目では、「そう思う」学生の方が、「そう思わない」学生よりも、HIV 陽性者に対する抵抗感は、10 ポイントから 25 ポイント高くなっている（表 13 網かけ部分）。学生は「把握」「管理」をどのようにとらえているのかが気になる。

表 13 差別のとらえ方と HIV 陽性者に対する抵抗感（問 20 と問 21 のクロス表）

		先生や同級生がいること				同じ職場で働くこと				近所に住むこと			
		N	抵抗を感じる	抵抗を感じない	わからない	N	抵抗を感じる	抵抗を感じない	わからない	N	抵抗を感じる	抵抗を感じない	わからない
行政は HIV 陽性者を把握して管理すべき	そう思う	406	28.6%	62.1%	9.4%	406	20.2%	71.4%	8.4%	405	13.3%	78.0%	8.6%
	そう思わない	295	6.8%	78.6%	14.6%	296	5.1%	82.4%	12.5%	296	3.0%	85.5%	11.5%
	どちらともいえない	394	14.5%	68.5%	17.0%	394	11.2%	73.1%	15.7%	393	5.6%	79.6%	14.8%
		一緒に食事をする				手をつないだり身体にふれる							
		N	抵抗を感じる	抵抗を感じない	わからない	N	抵抗を感じる	抵抗を感じない	わからない				
行政は HIV 陽性者を把握して管理すべき	そう思う	406	25.4%	64.8%	9.9%	405	41.0%	49.4%	9.6%				
	そう思わない	295	10.5%	76.3%	13.2%	296	17.9%	66.2%	15.9%				
	どちらともいえない	393	15.8%	65.6%	18.6%	392	30.1%	51.3%	18.6%				
		一緒に入浴すること				結婚すること							
		N	抵抗を感じる	抵抗を感じない	わからない	N	抵抗を感じる	抵抗を感じない	わからない				
行政は HIV 陽性者を把握して管理すべき	そう思う	406	60.3%	29.1%	10.6%	406	64.3%	20.4%	15.3%				
	そう思わない	296	35.5%	45.6%	18.9%	296	44.6%	30.7%	24.7%				
	どちらともいえない	394	46.4%	32.0%	21.6%	394	51.8%	20.8%	27.4%				

「HIV 陽性者は結婚をひかえるべきである」の項目では、「そう思う」と答えた学生の方が、「そうは思わない」と答えた学生よりも、HIV 陽性者との各状況において「抵抗を感じる」と答えた割合が、28 ポイントから 41 ポイント高くなっている（表 14 網かけ部分）。結婚に対する学生の意識は抵抗の度合いに大きな影響を与えているようである。「HIV 陽性者は結婚をひかえるべき」だと回答している学生の 86.3% が HIV 陽性者と結婚することに抵抗を感じると答えている。

表 14 差別のとらえ方と HIV 陽性者に対する抵抗感（問 20 と問 21 のクロス表）

		先生や同級生がいること				同じ職場で働くこと				近所に住むこと			
		N	抵抗を感じる	抵抗を感じない	わからない	N	抵抗を感じる	抵抗を感じない	わからない	N	抵抗を感じる	抵抗を感じない	わからない
HIV 陽性者は結婚をひかえるべき	そう思う	73	49.3%	39.7%	11.0%	73	49.3%	41.1%	9.6%	72	31.9%	58.3%	9.7%
	そう思わない	706	11.5%	76.9%	11.6%	707	7.6%	81.9%	10.5%	707	4.1%	86.7%	9.2%
	どちらともいえない	316	24.1%	57.6%	18.4%	316	16.1%	67.4%	16.5%	315	10.5%	72.1%	17.5%
		一緒に食事をする				手をつないだり身体にふれる							
		N	抵抗を感じる	抵抗を感じない	わからない	N	抵抗を感じる	抵抗を感じない	わからない				
HIV 陽性者は結婚をひかえるべき	そう思う	73	47.9%	42.5%	9.6%	73	64.4%	28.8%	6.8%				
	そう思わない	705	12.5%	76.2%	11.3%	704	24.4%	62.6%	12.9%				
	どちらともいえない	316	23.1%	56.3%	20.6%	316	37.3%	42.7%	19.9%				
		一緒に入浴すること				結婚すること							
		N	抵抗を感じる	抵抗を感じない	わからない	N	抵抗を感じる	抵抗を感じない	わからない				
HIV 陽性者は結婚をひかえるべき	そう思う	73	74.0%	17.8%	8.2%	73	86.3%	5.5%	8.2%				
	そう思わない	707	43.7%	40.3%	16.0%	707	48.8%	28.9%	22.3%				
	どちらともいえない	316	53.8%	25.6%	20.6%	316	59.8%	15.2%	25.0%				

「HIV 感染は防げたのだから、陽性者は自己責任で対処すべきである」との項目では、「そう思う」と答えた学生の方が、「そうは思わない」と答えた学生よりも、HIV 陽性者との各状況において「抵抗を感じる」と答えた割合が、14 ポイントから 20 ポイント高くなっている（表 15 網かけ部分）。

表 15 差別のとらえ方と HIV 陽性者に対する抵抗感（問 20 と問 21 のクロス表）

		先生や同級生がいること			同じ職場で働くこと				近所に住むこと				
		N	抵抗を感じる	抵抗を感じない	わからない	N	抵抗を感じる	抵抗を感じない	わからない	N	抵抗を感じる	抵抗を感じない	わからない
陽性者は自己責任で対処すべきである	そう思う	199	31.7%	60.3%	8.0%	199	25.1%	66.8%	8.0%	198	19.7%	72.7%	7.6%
	そう思わない	542	13.3%	75.5%	11.3%	543	9.2%	80.3%	10.5%	542	4.4%	86.2%	9.4%
	どちらともいえない	353	16.1%	63.7%	20.1%	353	11.3%	71.7%	17.0%	353	6.2%	76.5%	17.3%
		一緒に食事をする			手をつないだり身体にふれること								
		N	抵抗を感じる	抵抗を感じない	わからない	N	抵抗を感じる	抵抗を感じない	わからない				
陽性者は自己責任で対処すべきである	そう思う	199	29.6%	62.3%	8.0%	199	44.7%	49.2%	6.0%				
	そう思わない	542	15.7%	72.1%	12.2%	540	26.5%	59.6%	13.9%				
	どちらともいえない	352	14.5%	65.6%	19.9%	353	29.7%	49.9%	20.4%				
		一緒に入浴すること			結婚すること								
		N	抵抗を感じる	抵抗を感じない	わからない	N	抵抗を感じる	抵抗を感じない	わからない				
陽性者は自己責任で対処すべきである	そう思う	199	57.8%	35.2%	7.0%	199	71.4%	16.6%	12.1%				
	そう思わない	543	45.3%	37.8%	16.9%	543	51.2%	26.7%	22.1%				
	どちらともいえない	353	48.7%	29.2%	22.1%	353	50.1%	21.8%	28.0%				

⑤カミングアウトへの対応

問 22 では、「あなたが日常生活で親しく付き合っている A さんから、「HIV に感染している」ことを知らされた」後に、どのような態度をとると思うかを尋ねている。

「これまでどおりの付き合いを続け、できるだけサポートする」が 45.9%、「まったく問題にしない」が、HIV のことは触れずに、これまでどおりの付き合いを続ける」が 43.5%、「できるだけ、距離を置くようにする」が 5.0%、「付き合わないようにする」が 2.7%である（33 頁参照）。

「サポートするというのとはどういうことなのか。HIV のことに触れなければサポートはできないのだということまで学生が認識できているのかが本回答結果からはわからない。カミングアウトによってその大切な人の存在がカミングアウトを受けた側にとって変わるのかどうか。そのことによって行動は変わってきたりする」と尾澤さんと大釜さんは指摘する。学生にとっての大切な関係や親密な関係とはどういうものなのか、大切な存在や親密な存在とはどういうものなのか、その関係や存在のなかでカミングアウトによって行動や態度が変わるのかどうか、学生に問いかけてみたいと思う。今後の課題として、どのような過程や関係性を通じて付き合い続けようとしているのか、などを詳細に調査していく必要があると考える。

問 19 で、HIV 陽性者に対する差別・人権侵害として、「HIV に感染していることを周囲の人たちに言えずに苦しい思いをしている」ことをあげている学生で、「これまでどおりの付き合いを続け、できるだけサポートをする」と回答している者が 50.0%という結果となった（表 16）。「HIV に感染していることを周囲の人たちに言えずに苦しい思いをしている」人たちがいることを HIV 陽性者に対する差

別・人権侵害だととらえている学生が、その存在に目を向け、その声に耳を傾け、カミングアウトを受けた時には、「できるだけサポートをする」ことを願う。

表 16 差別のとらえ方と HIV 陽性者に対する抵抗感（問 19 と問 22 のクロス表）

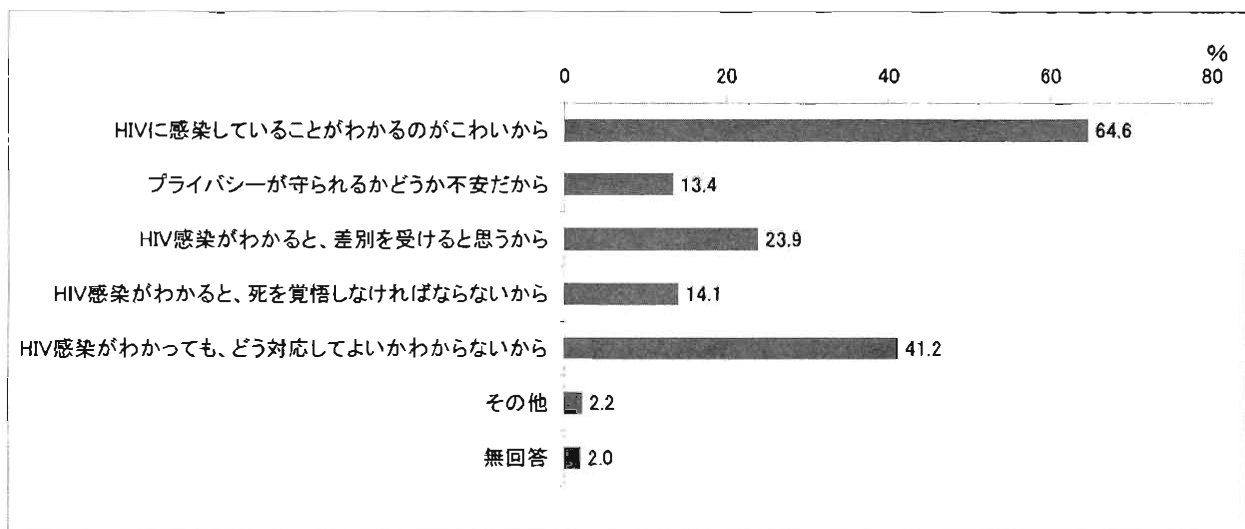
	日常生活で親しく付き合っている人から感染を知らされたとき				合 計	
	これまでどおりの付き合いを続け、できるだけサポートする	全く問題にしないが、HIVのことは触れずに、これまでどおりの付き合いを続ける	できるだけ距離を置くようにする	付き合いわないようにする		
HIV に感染していることを周囲の人たちに言えずに苦しい思いをしている	ない	143 42.2%	146 43.1%	30 8.8%	20 5.9%	339 100.0%
	ある	355 50.0%	325 45.8%	25 3.5%	5 0.7%	710 100.0%
合 計	498 47.5%	471 44.9%	55 5.2%	25 2.4%	1049 100.0%	

⑥HIV 検査を受けることについて

問 23 では、「HIV に感染したかもしれないと不安になる出来事が生じた」時に、検査を受けに行くと思うかどうかを尋ねている。「実際に検査を受けたことがある」2.4%、「検査を受けたことはないが、こんな場合は検査を受けに行くと思う」58.5%、「検査を受けるのをためらうと思うが、結局は受けに行くと思う」30.9%、「検査を受けに行かないと思う」5.8%という結果になった（34 頁参照）。

さらに、問 23 の付問 1 では、上記問 23 で、「検査を受けるのをためらうと思うが、結局は受けに行くと思う」、「検査を受けに行かないと思う」を選んだ回答者に、「検査をためらったり、検査を受けに行かないと思うのはなぜか」と尋ねている。その回答結果が図 5 のとおりである。

図 5 検査をためらったり受けに行かない理由（問 23・付問 1）



問 18 と問 23・付問 1 のクロス集計では、HIV 陽性者に対する偏見や差別が「かなりある」と思っている学生の 3 割が「HIV 感染がわかると、差別を受けると思うから」検査をためらったり、検査を受けに行かないと思っていることが表 17 からわかる。

表 17 HIV 陽性者に対する差別の認識と検査を受けない理由（問 18 と問 23・付問 1）

		感染がわかると差別を受けると思うから		合 計
		ない	ある	
偏見や差別の有無	かなりある	62 67.4%	30 32.6%	92 100.0%
	少しはある	168 75.3%	55 24.7%	223 100.0%
	ない	27 93.1%	2 6.9%	29 100.0%
	わからない	44 80.0%	11 20.0%	55 100.0%
合 計		301 75.4%	98 24.6%	399 100.0%

「HIV 感染がわかると、差別を受けると思うから」検査を受けない学生自身が、HIV 陽性者に対する抵抗感を持っていることが表 18 からわかる。検査をためらったり、検査を受けに行かないと思う理由として、「HIV 感染がわかると、差別を受けると思うから」を選んだ学生（表 18 の「ある」）は、選んでいない学生（表 18 の「ない」）に比べて、HIV 陽性者との各状況に応じて、「抵抗を感じる」との回答が 7 ポイントから 20 ポイント高くなっている（表 18 網かけ部分）。

表 18 HIV 検査を受けない理由と HIV 陽性者に対する抵抗感（問 23・付問 1 と問 21）

		先生や同級生がいること			同じ職場で働くこと			近所に住むこと					
		N	抵抗を感じる	抵抗を感じない	わからない	N	抵抗を感じる	抵抗を感じない	わからない	N	抵抗を感じる	抵抗を感じない	わからない
HIV 感染がわかると、差別を受けると思うから	ない	304	17.8%	68.1%	14.1%	304	10.9%	75.0%	14.1%	304	6.6%	80.6%	12.8%
	ある	98	29.6%	57.1%	13.3%	98	24.5%	66.3%	9.2%	98	14.3%	77.6%	8.2%
		一緒に食事をする			手をつないだり身体にふれること								
		N	抵抗を感じる	抵抗を感じない	わからない	N	抵抗を感じる	抵抗を感じない	わからない				
HIV 感染がわかると、差別を受けると思うから	ない	303	16.5%	68.3%	15.2%	304	27.0%	56.2%	16.8%				
	ある	98	30.6%	58.2%	11.2%	98	44.9%	43.9%	11.2%				
		一緒に入浴すること			結婚すること								
		N	抵抗を感じる	抵抗を感じない	わからない	N	抵抗を感じる	抵抗を感じない	わからない				
HIV 感染がわかると、差別を受けると思うから	ない	304	45.7%	34.5%	19.7%	304	53.3%	20.4%	26.3%				
	ある	98	66.3%	22.4%	11.2%	98	70.4%	13.3%	16.3%				

また、HIV に関する知識について「わからない」と回答している学生のうち、「HIV 感染がわかっても、どう対応してよいかわからないから」検査をためらったり、検査を受けに行かないと回答している学生が半数いることが表 19 からわかる。表 19 は、問 14 の HIV に関する知識を問う項目のうち、「HIV に感染すると死んでしまう」と「HIV に感染しても必ずエイズになるわけではなく、薬によって抑えることができる」について、「そう思う」、「そうでないと思う」、「わからない」と回答している学生のなかで、HIV 検査をためらったり、検査を受けに行かないと思う理由として、「HIV 感染がわかっても、どう対応してよいかわからないから」を選択した学生を「ある」、選択しなかった学生を「ない」としてクロス集計したものである。知識を問う 2 つの項目で、「わからない」と回答した学生の半数以上が、HIV 検査をためらったり、検査を受けに行かないと思う理由として、「HIV 感染がわかっても、どう対応してよいかわからないから」と回答している（表 19 網かけ部分）。

表 19 HIVに関する知識と HIV 検査を受けない理由（問 14 と問 23・付問 1）

		感染がわかって、どう対応してよいかわからない		
		N	ない	ある
HIV に感染すると死んでしまう	そう思う	69	65.2%	34.8%
	そうでないと思う	232	60.3%	39.7%
	わからない	96	45.8%	54.2%
HIV に感染しても必ずエイズになるわけではなく、薬によって抑えることができる	そう思う	225	60.9%	39.1%
	そうでないと思う	78	64.1%	35.9%
	わからない	99	46.5%	53.5%

⑦情報提供と教育の重要性

HIV と人権・情報センターは、HIV 陽性者支援を行っている。検査内容、検査結果の伝え方、結果に応じた支援内容など、検査を受けに来る人たちに安心してもらうための情報提供をしたうえで、自発的に当事者が検査を受けることを Voluntary Counseling and Testing (VCT) というのである。検査を受けるかどうかを決めるのは本人である。検査事業をするところはもっと丁寧でないといけない、孤独にならないようにバックアップの場所、内容を伝えたいという検査を実施すべきだと尾澤さんは指摘する。

日本で検査を受ける人たちは、妊婦健診を入れても大人の 2% しかいないとのことだ。欧米で新規感染が増えないようになったのは、検査を受けに行く人たちが、多いときで 70~80% いたからだそうだ。下火になった今でも 40~60% という欧米に比べて、2% しか検査を受けない日本では、検査を受ける人が「特殊な人」とラベリングされる。欧米の病院には、VCT がユニットとして体制化された所もあるし、広報も普及しているため、市民にとっては、HIV 検査が身近なこととなっている。日本では、世界エイズデーについて報道されることもない。

マスコミの取り上げ方も多くの問題を生んでいる。報道する側の「こわい」という意識が HIV・エイズを「こわい」ものとして伝えてきたことも一因としてあるだろうとのことだった。感染しても死なないうこと、慢性疾患の 1 つ、性生活習慣病の 1 つだとのとらえ方がされていないこと、正確な情報や知識を持たないことが、「こわい」とのイメージを押しよけできない原因なのではないか。「こわい」というイメージが 20 年ほどの人生を生きてきた学生たちにどこでつくられてきたのか。それが学校教育であったりマスコミ報道であったりすれば、そうではない情報を伝える教育が重要だと大釜さんは指摘する。そうすれば、「こわい」「不安」「死を覚悟しなければならない」という人たちは減っていくのではないかと指摘しながら、「死を覚悟しなければならない」から検査をためらったり受けに行かないと思っている学生がいるという悲しい現実を重く受け止める。検査は数時間かもしれないが、結果を知っていく、検査を受けた人の体のことを知っていく支援者として、「こわい」「不安」「死を覚悟しなければならない」と思わせている社会があるとしたら、検査を実施している側としてはこの調査結果から今後の課題を見ていく必要があると話してくれた。

本調査でも、「実際に検査を受けたことがある」と回答した人は 2.4% であった（34 頁参照）。検査を受けたことがある人にも、検査を受けたことによってどのように思ったのか、「こわい」「不安」といった思いは変化したのかどうかを聞くことによって、身近な学生の声を学生たちに伝えていくことができるのではないかとこの助言もあった。

HIV は確実に予防することができる。必要とするサポートを提供している人や団体、HIV と共に生

きる人どうしが集まる場もある。福祉制度の利用で、負担がないよう治療費を削減することもできる。

HIVの感染を早く知ることにより、早期に専門の医師にかかわりエイズ発症予防などの治療を受けることができる。そのため、早期の相談・検査が必要であるし、セックスのときには HIV 感染を予防することが必要である。今日の大学における教育の役割は大きい。

【特定非営利活動法人 HIVと人権情報センター】(ホームページから抜粋)

HIVと人権・情報センターは、エイズによって偏見・差別から苦しめられている人たちを直接支援するため、1988年に大阪で発足した民間ボランティア団体です。その運動の輪は全国各地に広がり、多種多様な経験をもつ約数百名がJHCの会員として活動しています。

HIV感染者/AIDS患者および感染不安をもつ人たちを、HIVの感染経路によって区別することなく(薬害、性行為、薬物注射、セクシュアリティ、国籍の違いなど)、支援しています。そして、HIV/AIDSに関する啓発活動とともに、偏見がない『共に生きる社会』を築いていくことをもっとも大切な目標とし、HIV問題の総合的な解決に取り組んでいます。

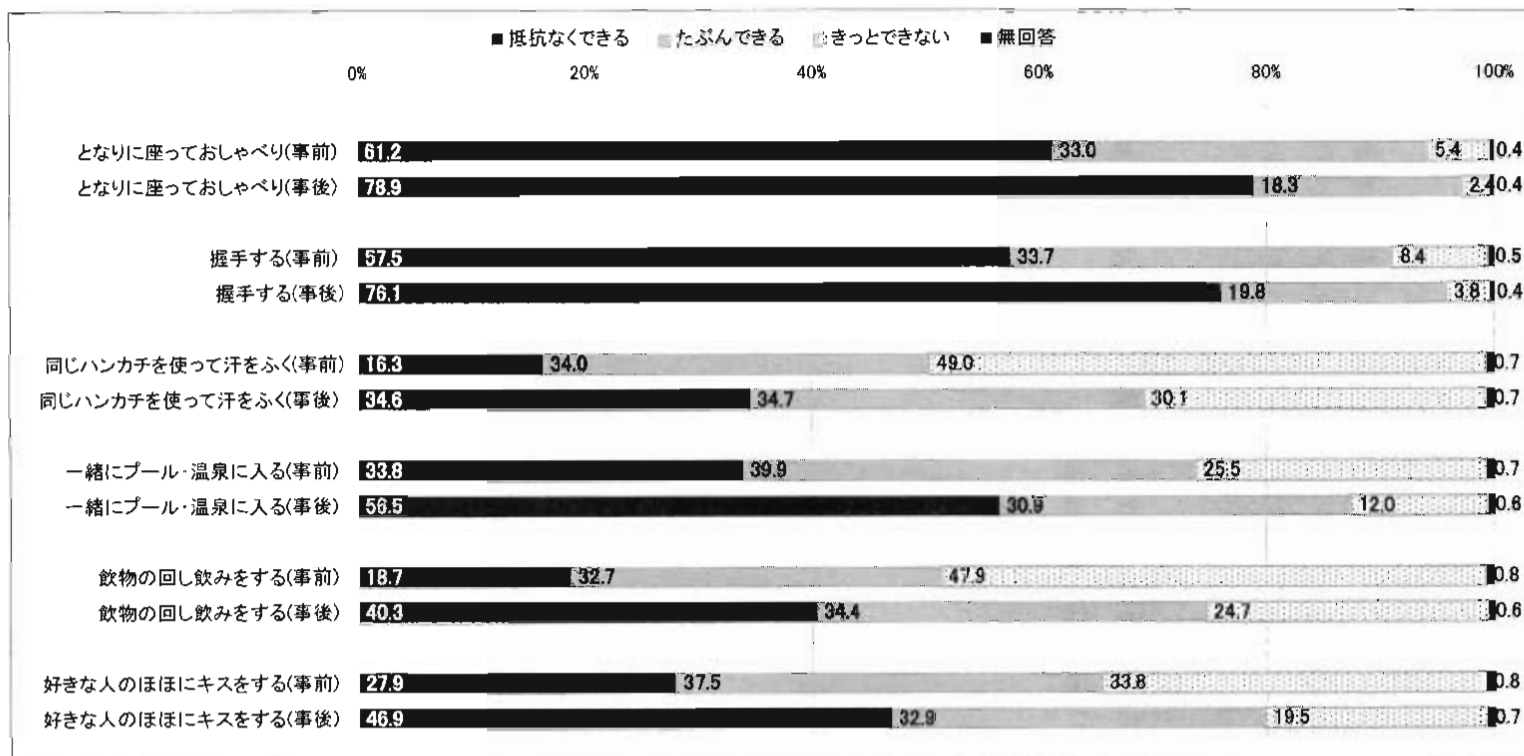
特定非営利活動法人 HIVと人権情報センター 関西支部 www.npo-jhc.com

連絡先：06-6393-8851 kansai@npo-jhc.com

平成 17 年度厚生労働科学研究 エイズ対策における関係機関の連携による予防対策の効果に関する研究
主任研究者・五島真理為

全国高校生、11,711 名に行った、若者相互による HIV/AIDS 啓発プログラム(YYSP®)実施前と後に行った調査。

Q. 身近な人が感染者だとしてあなたは以下のことができますか。



感染者との行為について、ある程度学習をしたら、「抵抗なくできる」の割合が20%前後増加しています。
近畿大学調査の間 21 の比較の参考にさせていただけたらと思います。